

原宿表参道から世界に発信する SATOYAMA ビジョン

—都市を里山化する—

飯島博

認定 NPO 法人アサザ基金
代表理事

中心に鎮守の森がつくられた 近代都市 TOKYO

東京は世界の主要都市の中でも特異な存在といえるだろう。その特色を一言で云えば中心に都市が無い都市ということになる。ロラン・バルトは「空虚な中心」と語ったが、そこにはむしろ、近代とは別の文脈を持つ空間の広がりや時間の流れがある。

近代とは別の文脈を持つものとは、何か。それは、明治神宮の巨大な鎮守の森である。世界の代表的な都市の中心には凱旋門やオペラスクなどのモニュメントがつくられている。ところが、東京では、近代

化と同時に中心に日本の古代からの自然崇拝の伝統を引き継ぐ巨大な鎮守の森がつくられた。古代と近代が表裏を成す都市。東京は、他に例のない特異な近代都市なのだ(図1)。

東京の特異性は中心にだけあるのではない。東京は、里山が潜在する都市でもある。里山は人と自然との対話と交流から生まれる場である。その里山のネットワークが東京には潜在している。東京は、人間と自然を分けて考える近代とは、異なる基層の上につくられた都市である。

西洋の伝統的な都市の多くは、いわゆる城郭都市であり、人間の領域である都市空間と自然の領域で

ある外部空間を分ける空間意識の上につくられてきた。人間と自然を二項対立でとらえる思想が、そのベースにはある。

それに対して日本では、古来から人と自然を分けて考えない一体のものとして捉える思想や文化が育まれてきた。日本には西洋等にあるような城郭都市はつくられず、都市(内)と自然(外)との境界は曖昧であった。人と自然を壁で仕切る都市が「壁の様式」であるとすれば、日本には本来人と自然が表裏を成す「膜の様式」があったと考えている。

東京の前身である江戸も城郭都市ではなかった。実際に、江戸は変わった都市だったらしい。当時世界最大の人口100万人を有した江戸を訪れた外国人の多くが、市街地で見られる野生生物の多様さに驚いている。当時の江戸では、鶴やコウノトリ、トキ、白鳥なども見られたという。江戸は、世界最大の里山都市だったのかもしれない。江戸は間違いなく、西洋の都市とは異なる文脈でつくられた都市だった。今の東京を見ると全く江戸とは別世界のように思えるが、江戸と東京の間には連続性がある。里山都市江戸の文脈は大都市東京の基層に今も生きている。ひとつは明治神宮の森であり、もうひとつは都市に潜在する里山のネットワークである。

鎮守の森は、 ひとつのビジョン

明治神宮の森は、当然だが日本の近代化以前につくられた森ではない。明治神宮は大正10年(1920)に創建されている。近代都市の形成と共につくられた森だ。先人は近代都市の形成にあわせて、都市の中心部に古代からの自然崇拝の伝統をベースにした鎮守の森をつくった。東京は、世界でも稀有な都市である。鎮守の森とは、自然崇拝をもとに古代から

聖域(神の依り代)として守られてきた不伐の森である。明治神宮の森は、全国からの献木によってつくられた森だが、この土地の潜在自然植生に配慮して、遷移を進める形で維持されている。出来るだけ人の手を加えず自然の営みに任せる場である。つまり、管理を基本とする公園とは全く違う。

自然の営みに任せるといっても、先人達はこの森の未来像(ビジョン)をしっかりと描いていた(「明治神宮御境内林苑計画」)。先人達が50年後100年後150年後の未来を見据えて創造した鎮守の森というビジョンは、確実に実現しつつある。現在の明治神宮では、森がつくられてから90年以上が経ち、鎮守の森にふさわしい景観を目にすることができるようになった。スダジイやシラカシなどの常緑広葉樹が優勢となり、いわゆる照葉樹林に被われている。照葉樹林は、関東地方の自然林のひとつであり、縄文時代の面影を伝える森でもある。

近代都市の形成期に先人達は、都市の中心に鎮守の森という未来へのビジョンを置いた。そして、今を生きる私達にはこの鎮守の森というビジョンに繋がる、里山というビジョンを都市全体へと展開していくことができるのではないか。それを私は都市の里山化と呼んでいる。里山化は過去に戻ることはない、逆に未来に向けて都市を創造的に展開していくことを意味している。東京という都市の未来を考える時に、明治神宮の森から広大な都市空間に向けて延びる一本の緑の線「表参道」は、ふたつのビジョンを結ぶ重要な位置にあることが明らかになる。

里山のネットワークが 潜在する都市 TOKYO

明治神宮の森や代々木公園がつくられる以前の代々木台地には、土地のわずかな起伏を生かして雑



図1 中心に鎮守の森がある大都市・東京。生き物の道が都市の中心から広がる可能性がある



世界の主要都市の中心にはモニュメントがある
写真©Yoshinao Nakamura, 中村芳直/PIXTA (ピクスタ)

木林や畑、水田、茶畑、溜池などの多様な環境がパッチワーク状に配置された、典型的な里山景観が展開していたことが、明治時代初期に測量された迅速図などの資料から読み取ることができる(図2)。

原宿や代々木、千駄ヶ谷、渋谷等は、郊外に位置していたため、明治時代末から大正時代頃までは農村地帯であった。渋谷川の支流河骨川をモデルにした唱歌「春の小川」が作られたのは、1912年である。このような里山の景観が、かつては山の手台地を中心に広く被っていた。つまり、創建当時の明治神宮は里山のネットワークの中にあった。

これらの多様な環境を結び付けていたのは水、つまり水系である。図3は東京都と同じ関東平野に位置する茨城県南部の水系を表している。ここに見られる複雑な水系は、谷津（谷戸）と呼ばれる谷地形のネットワークによってつくられている。

原宿周辺は、特に谷地形が豊富な地域である。明治神宮の森や代々木公園がある代々木台地を両手で包み込むように枝分かれした大きな Y 字型谷地形「谷津」があり、さらにそこから枝分かれした枝谷

津が台地の奥（現在の明治神宮神苑菖蒲園や南池を含む谷）にまで延びている（図4）。このような地形の特徴は原宿周辺だけではない。谷津地形は山の手
の大半を被っている。これらの谷津の中には、かつては川や小川が流れ、その周囲には水田が、さらにその周囲には斜面林が帯状に続いていた。それは、正に水と緑のネットワークとなって地域を被っていた。

台地を樹枝状に刻む谷津地形は、関東地方の里山を特徴付ける重要な要素となっている。谷津には、周囲の台地上の森を水源とする湧水が豊富にあることから、早い時期に水田稲作が行なわれ集落も形成された。集落を基点に雑木林や畑、水田、溜池、茅場、鎮守の森などの多様な土地利用が行なわれ、持続可能な循環型の暮らしが営まれていた(図5)。谷津と人々との繋がりは、さらに遡ることができる。原宿の谷津の周囲からは、縄文時代や弥生時代などの古い時代の遺物が数多く出土しているからだ。

国木田独歩の「武蔵野」では、主人公が里山を歩き、斜面の雑木林を下っていくと突然明るい田圃が現れ

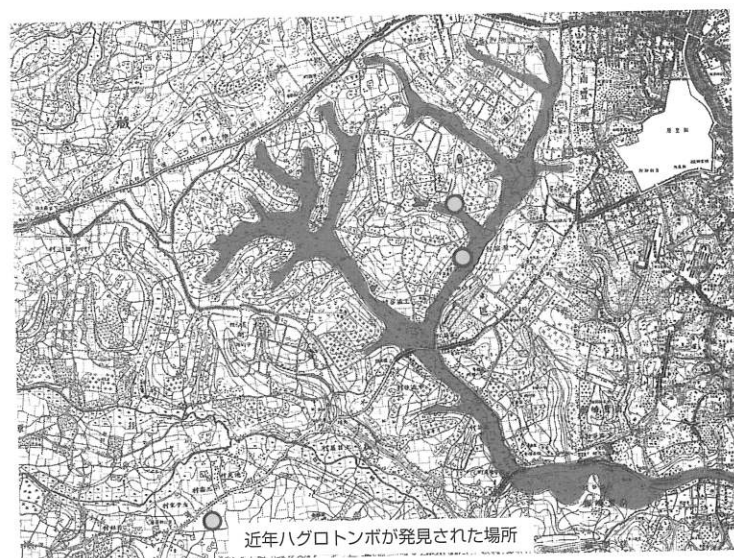


図2 1881年当時の表参道周辺
(塗りつぶし部分は谷津田迅速図)



図3 霞ヶ浦流域に分布する谷津田
(迅速図に彩色)

るといった状景が描かれている。これは正に谷津の
谷底につくられた水田、谷津田の描写である。

この谷津こそが、平坦で単調に見える関東平野に多様に変化に富んだ環境をつくり、豊かな生態系や文化を支える基盤としてあった。複雑に枝分かれした谷津毎に、それぞれ集落がつくられ、台地の森からの湧水や土地の起伏を生かした多様な土地利用が行われた（図5）。その結果、谷津の周囲に多様な環境のユニットができ、様々な生物が生息可能な条件が揃った。生物の多くは生活史の中で森林や草原、水辺などの多様な環境を組み合わせながら生息している。このような谷津という複雑な地形に被われた基盤（水系のネットワーク）の上に、多様な生物と共存する里山の文化が営まれてきたのだ。谷津は水系の基本単位であり、生態系の基本単位であり、集落（地域）の基本単位でもあった。

そして、重要なことは里山の基盤となる谷津地形の多くが、東京都市部に今も残っているということだ。この都市に潜在する里山のネットワーク（谷津地形）が、東京を世界の他の都市から際立たせるも

う一つの重要な要素となっている。近代化以前から都市が形成されてきた東京では、土木機械の無かった江戸時代にすでに都市が形成されていたため、今のような大規模な地形改変が行われず、里山であった頃の地形が生かされている。だから、東京には坂が多い。現在の原宿周辺を歩いてみれば、誰もが土地の起伏の多さを感じるはずだ。里山を散策したことのある人なら、かつてそこにあった谷間の田んぼや小川、斜面の雑木林や畑などの風景を想起できるだろう。

視野をさらに広くとれば、明治神宮の森や代々木公園という大きな緑地は、この谷津地形のネットワークの中につくられ、現在も位置していることがわかるだろう。もちろん、今の谷津地形はビルや道路などで被われてわかりにくくなっている。しかし、地形そのものは今も健在であり、それらの地形に沿って緑地や水辺なども点在している。緑地や水辺を結び付ける里山の文脈は、都市に今も潜在しているのだ。

つまり、都市の中心部に位置する明治神宮の森や

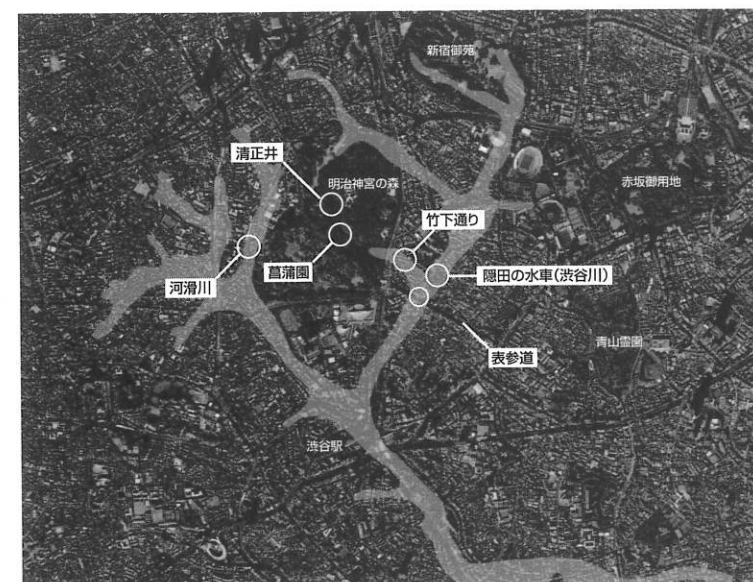


図4 原宿周辺の谷津地形 地図データ© 2013 Google, ZENRIN

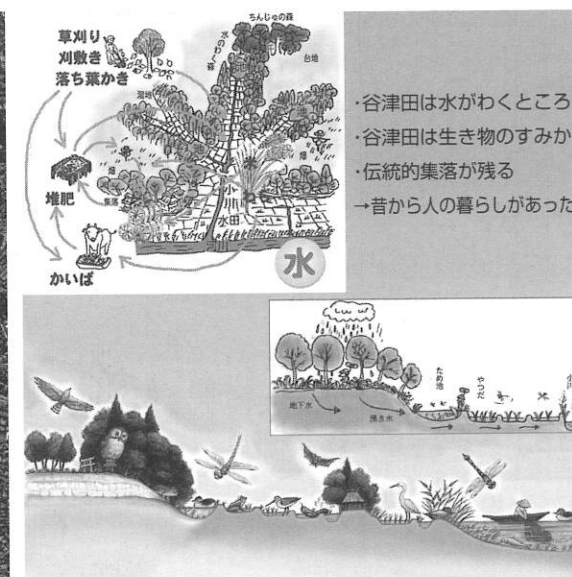


図5 谷津をめぐる人と自然

代々木公園は、都市に潜在し広がる里山のネットワークに接続していることになる。(代々木台地には明るい草原的環境である代々木公園と、暗い常緑広葉樹の森である明治神宮のセットがある。)

現在の神宮の森は都市の孤島のように存在する巨大な鎮守の森だが、その周りには里山のネットワークが潜在していることがわかる。都市に潜在する里山のネットワークを、未来の都市づくりにどう生かしていくのか。鎮守の森というビジョンに繋がる里山ネットワークというビジョンを描いていくことで、次第にその方法が見えてくるはずだ。

明治神宮の森をバックアップする 里山のネットワーク

明治神宮の森は、都市空間に浮かぶ緑の孤島のように見えるが、実はこの森は自己完結した閉鎖系ではない。神宮の森と周囲の都市空間の間には、生物の移動交流がある。とくに、鳥類は周辺から森へと多くの種子を運び込んでいる。野鳥達がどのような種類の種子を森に運び込むかによって、神宮の森の未来の姿が左右される。

神宮の森の周囲からの種子供給は、林床植生のみならず将来の森を被う高木層をつくる稚樹の生育にも大きな影響を与える恐れがある。東京都港区にある白金自然教育園では、スタジイ林の林床がシュロや園芸植物、外来種などで被われてしまい、次代のスタジイ林をつくるスタジイの稚樹の生育が阻害されている。

神宮の森が、先人達のビジョンに基づき鎮守の森(照葉樹林)を形成し、その荘厳な姿を維持し続けるためには、先述したように鎮守の森のビジョンに繋がる里山ネットワークのビジョンを描いていくことが求められる。潜在自然植生に基づき、この地域

の照葉樹林を構成する植物の種子が、周囲から神宮の森に供給されるように配慮した植樹や緑化(屋上庭園や公園、プランター、鉢植え等)の発想が必要となる。都市に潜在する里山ネットワークを生かすことで、原宿表参道の人々も神宮の森づくりに参画することができる。このように神宮の森の生物多様性を保全していくためには、在来植物の種子供給をバックアップする取り組みが必要となる。

里山は人と自然の対話や 交流によって生成する場

里山という言葉から、多くの人は森や池や田圃がある風景を思い浮かべるだろう。里山は、手付かずの自然とは異なる。そこに暮らす人々の働きかけ(萌芽更新や下草刈り、落ち葉かき等)と、その働きかけへの自然からの応答によって生成され続ける場である。つまり、そこにただ森があったり池があったりしただけでは里山には成らない。場は、場所のよう限定されない。里山は単なる場所ではなく、人と自然との対話や交流によって生まれる動的な場である。人と自然を分けて、人が一方的に自然を管理して利用するという近代の発想からは、里山という場は生成しない。つまり、里山は公園や自然保護区ではない。

かつて里山に多様な生物が生息できたのは、人の手が及ばない土地利用の空白部分が残されていたからではない。里山という空間では、人々の生活域や生産域と生物の生息域が重なっていた。さらに、人々が循環型の生活や生産を通して土地への働きかけを行うことで多様な環境(空間的・時間的モザイク)が生まれ、多くの生物の生息を可能にした。そのような人の働きかけが、里山に生物多様性のホットスポットが生まれた背景にはある。

だから、人と自然との対話や交流が失われると里山という場は消滅する。地域の人々の暮らしが自然から離れ、働きかけが失われた里山からは多くの動植物が姿を消し、生物多様性が失われ多くの生物が絶滅に追い込まれていく。全国各地でこのような事例が数多く報告されている。里山の荒廃や生物多様性の低下などの現象の多くは、このように人と自然との対話や交流が失われた結果として生じたものだ。「里山という場」を生む人と自然との対話や交流は、その土地の地形の変化や水の流れや風の動きなどを

ベースに営まれてきた。ところが、近年の開発では大型の重機によって大規模な土地の改変が行えるようになり、地形や水の繋がりまでが消失している。

しかし、先述したように東京では、里山のベースになった谷津地形が今も生きている。とくに、原宿周辺には地形だけではなく湧水などの水の繋がりが生きている場所もある。だから、生き物達が意外としぶとく生き残っている(図6)。

確かに、今の東京を見れば緑は少ないが、里山を単に緑の量で評価することはできない。里山を人と



図6 原宿で見つかった生きもの



図7 毎年恒例の神宮前小学校の夏休み講座。風の道と生き物の道を探す! 東京都心部にも、たくさんの生き物がいることを、子ども達はちゃんと知っています!

自然との対話や交流によって生成する場と捉えるならば、今からでも原宿や東京都内を里山化することは可能だろう。人々に都市に潜在する里山（谷津地形のネットワーク）を意識させ、暮らしの中に自然との対話や交流を生み出す文脈を浸透させていくことから、都市の里山化は始まるからだ。

都市を価値創造的に里山化していくためには、里山環境を創出する人による自然への働きかけと類似する機能を持った都市の営み（機能合同）を抽出したり、既存の営みに付加価値として里山再生の機能を浸透させる取り組みを考えていくことができる。このような取り組みが展開することで、都市に新たな人や物や金の動きを創ること（活性化）やコンテキストブランド（都市の里山ブランド）の創出にも繋がる。

そのような動きをつくることができれば、SATOYAMA は環境の世紀に大都市東京が向うべき未来へのビジョンになり得るだろう。もうすでに、そのビジョンの一部は、都市の大地に描かれているのだから。まずは、ネットワークを移動するトンボや蝶などの生き物や流れる風を感じ取ることから、



図8 川と風のメタファー、ハグロトンボが生き残っていた！湧水の流れる川と森からの涼風を求めて暮らす。かつて東京都区内でも見られたが1970年代には姿を消した。近年原宿で見つかっている

図9 ハグロトンボの目撃地点と旧隠田川の流路
地図データ © 2013 Google, ZENRIN

都市の大地に描かれている SATOYAMA のビジョンを読み取る作業から始めてはどうだろう（図7）。

生き物が教えてくれる 原宿表参道、そして都市の可能性

2009年、原宿に在住の石川良輔東京立大学名誉教授の御宅に、話をうかがいに行った際に、私は数年前に原宿で採取されたという意外な生物の標本を見せられ驚いた。東京都市部では1970年代には姿を消したと言われていたハグロトンボの雄の標本だった。ハグロトンボは、東京都のレッドデータブック（絶滅の恐れのある生物のリスト）では、絶滅危惧Ⅱ類（23区）に指定されている生物だ。そのハグロトンボが都市の中心部に生き残っていたとは、全く予想外であった（図8）。

このハグロトンボは、明治神宮の森を水源に流れる旧隠田川沿いの谷津地形に位置する地元穂田商店会長の佐藤銀重さんのお店に舞い込んで来たところを、佐藤さん本人によって採取されたものだということを、（その後、2010年にも東郷神社境内で目撃例がある。）



ハグロトンボは暑さに弱い風通りの良い雑木林などの涼しい場所に生息していて、繁殖は緩やかな流れがあり水草が生える水質の保たれた小川や河川で行う。このトンボは、地表近くを低空で飛ぶため、移動には環境の連続性が必要で、長距離を移動することができない。ヒートアイランド現象によって街中が熱くなり、小川や河川が暗渠になって地表から姿を消した都心部で、ハグロトンボが生き残っていることなど誰が予測できただろうか。

ハグロトンボは里山の水と緑の良質な空間を象徴する生物のひとつだ。このトンボは、東京近郊の農村部でも今ではほとんど見られなくなっている。そのような環境悪化に敏感なトンボが、どうして東京都心部に生き残っていたのだろうか。おそらく、明治神宮の神苑にある谷津に生き残っていたハグロトンボが、何かの拍子に神宮の森から出てしまい、都市の中に残る谷津地形に沿って移動したのだろう。

明治神宮の中には、かつての谷津地形が里山環境と共に残されていて、その谷頭には清正井として知られる湧水もある（図10）。また、照葉樹林に被われた神宮にあっても、ここには谷に沿って昔ながらのクスギやコナラ等による落葉広葉樹林（雑木林）が残されている。谷間には、菖蒲園がつくられ、かつて水田であった頃の面影を残している。この菖蒲園をとりまく景観（図11）は、今も里山が残る霞ヶ浦流域の谷津田とよく似ている（図12）。この神宮神苑にある谷津の谷筋は、JR 原宿駅を横断し竹下通りに沿ったブラムスの小径を下り旧隠田川沿いの谷（キャットストリート）に合流する（図9）。

神宮神苑一帯は、大都市のど真ん中に奇跡的に残された里山の空間であり、ここにはハグロトンボなどのかつて原宿の里山に生息していた動植物も数多く生き残っているはずだ。先述したように、原宿や



図10 明治神宮・清正井。谷津の最上流部にある。竹下通りにつながる谷の最上流には、谷頭に湧水がある谷津田の典型的な景観。15度前後と一定していて、毎分60リットルの湧き水量を誇る



図11 里山環境が残る明治神宮神苑・都心に残る谷津田

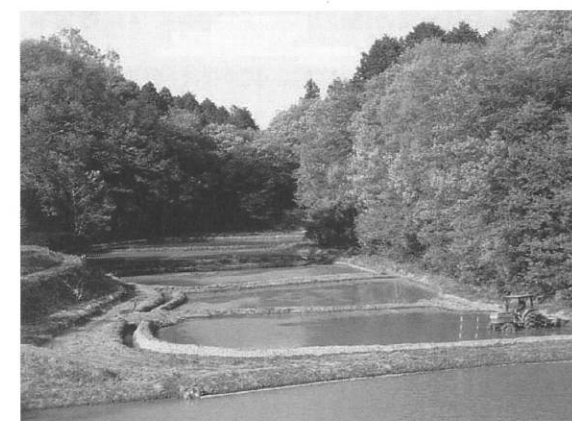


図12 典型的な谷津田の風景（霞ヶ浦流域）
写真 © NPO法人アサザ基金

代々木、千駄ヶ谷、渋谷等は、郊外に位置していたため、明治時代末から大正時代頃までは農村地帯であった。だから、明治神宮の造営が始まった時期には、まだその周囲に里山が残り多くの生物が生息していたはずだ。その後、周辺の開発が進んだが、神宮の森の中に残された谷津周辺の里山環境は神苑として保全され、里山の生物は生き残ることができたと考えられる。

今は、都市の海に浮かぶ箱舟のような空間(神苑)に残っている生物達も、神宮の森に繋がる谷津地形のネットワークを生かしていくことができれば、都市の中心から都市全体に移動していくことができるようになる。また、逆に都市周辺の農村部から都心に向かって、生物の供給を促すことも期待できる。

クールアイランド現象を生かした生物多様性保全

生物の移動には、地形や緑と共に、気温も重要な要素となる。トンボや蝶などの昆虫は自分で体温を調整できない変温動物であるため、活動に適した温度域がある。そのため、高温になりやすい都市部では活動域が限られる。そのような条件の都市に暮らす昆虫などの生物にとって、空気を冷却する機能をもつ大きな緑地(クールアイランド)としての明治神宮の森や代々木公園の存在は大きい。

周囲より標高の高い位置(代々木台地)にある神

宮の森で冷やされ比重が重くなった空気は低い方へと流れ出す(森のしみ出し効果や風下移流効果等)(図13)。つまり、森の冷気は代々木台地を囲む谷津地形に下りて、谷の中を流れる。この空気の流れの存在を知りたければ、夏の日にJR原宿駅のホームに立ってみるといい。向い側の神宮の森から流れ出てくる冷気を感じることができるはずだ。生物がこのような森の風に乗って移動することを考えると、谷津地形のネットワークは生物たちの道として捉えることができる。

代々木台地にある大きな森(クールアイランド)から、都市空間へと流れ出す冷気をうまく広げていくことができれば、生物の道を広げるだけでなく、都市のヒートアイランド現象の緩和や温暖化防止の取り組みに活かすこともできる。NPO法人アサザ基金では、毎年夏に原宿で森の風と生き物の道を探して歩く風船ウォークを開催している(図14)。

都市の緑化が「緑の量を増やすこと」だとすれば、都市の里山化は「緑の文脈を広げていくこと」だと言える。このように森の風や生物の道を意識して未来都市のデザインを構想していくことができれば、都市を里山化する道筋も次第に明らかになっていくだろう。



図13 明治神宮の森の空気の流れ



図14 毎年夏に原宿で開催する風船ウォーク

東京 SATOYAMA ビジョンにおける表参道櫟並木の位置づけ

これまで論じてきたことから、表参道の櫟並木を見直してみると、その存在意義や位置付けが明らかになるだろう。櫟並木は明治神宮の森から都市空間に延びる連続した緑の線「自然空間」であり、参道として神宮に付随する「文化空間」でもある。表参道は、自然的要素と文化的要素が重なり合ってきた、自然と都市を結ぶ架け橋だといえる(図15)。

櫟並木が高い連続性をもった緑の線として存在することで、神宮の森と都市空間を結ぶ生物の移動路としての高い機能をもつことが期待できる。櫟並木は谷筋(谷津地形)と交差して延びることから(図9)、谷筋へと生き物の道を広げていくことができる。

さらに、その先や周囲に分布する飛び石状の緑地にも、生物を供給することができる。現在の緑地と緑地の間に、生物の移動可能な距離を想定して谷津地形に沿った新たな緑地や街路樹、屋上庭園、学校ビオトープ等をつくることで、都市空間に生き物の道を広げていくことができる。(里山に生息する多

くのトンボやチョウ、水生昆虫などが約1km程度移動できると仮定して、生息地の配置・ネットワークを考える(図16)。

このような文脈で都市空間を読み替えていくことで、潜在する里山を浮上させる都市のデザインムーブメントを展開できる。神宮の森から延びる一本の緑の線によって、都市に潜在する里山に息を吹き込むことができれば、東京を里山化するビジョンはより明確になる。

このように、表参道には東京という都市全体を変える力が潜在している。その力をさらに際立たせるためには、都市に潜在する里山のネットワークの中に表参道を位置付け、都市を里山化するために表参道の機能を向上させる視点が必要となるだろう。表参道の生態系としての機能を向上させることができれば、都市全体の環境を変えていくことができる。表参道がそのようなインセンティブをもった時に、都市の里山化は動き出すだろう。

機能の向上とは例えば、櫟並木の緑の線に重なる水の流れの創出である。櫟並木に沿って木陰の小川ができれば、神宮の森からトンボや蝶などの生物が

今よりも多く移動するようになり、表参道を散歩する人々がオニヤンマやハグロトンボが舞う姿を見ることも可能となるかもしれない。小川に必要な水源は、地下鉄内の豊富な湧水や暗渠となった河川水などを使うことができるだろう。

櫟並木の下に小川をつくることは乾燥化が進む都市環境に良い影響を与えることになる。現在、櫟並木では乾燥化が進んでいて、櫟の生育や生物に悪影響を及ぼしている。例えば、湿った土に依存するニイニイゼミは明治神宮や代々木公園では見ることができ、櫟並木ではほとんど見ることができない。地下鉄内に湧出して下水管に排水されている豊富な

地下水を使って、表参道の車道に散水を行うことができればさらに効果的である。路面に散水をして冷やせば、歩道を歩く人々にも心地良く感じられ、生じた冷気を交差する谷筋にも送ることができ、ヒートアイランド対策にもなる。

メタリックな胴体を緑色に光らせ黒い羽でひらひらと優雅に舞う、里山の涼の象徴ハグロトンボが見られる並木道など、世界の何処の都市にも無いだろう。そのような光景を実現することは、表参道が土地の自然と文化に育まれた「世界中でここにしかないブランド」になることでもある。

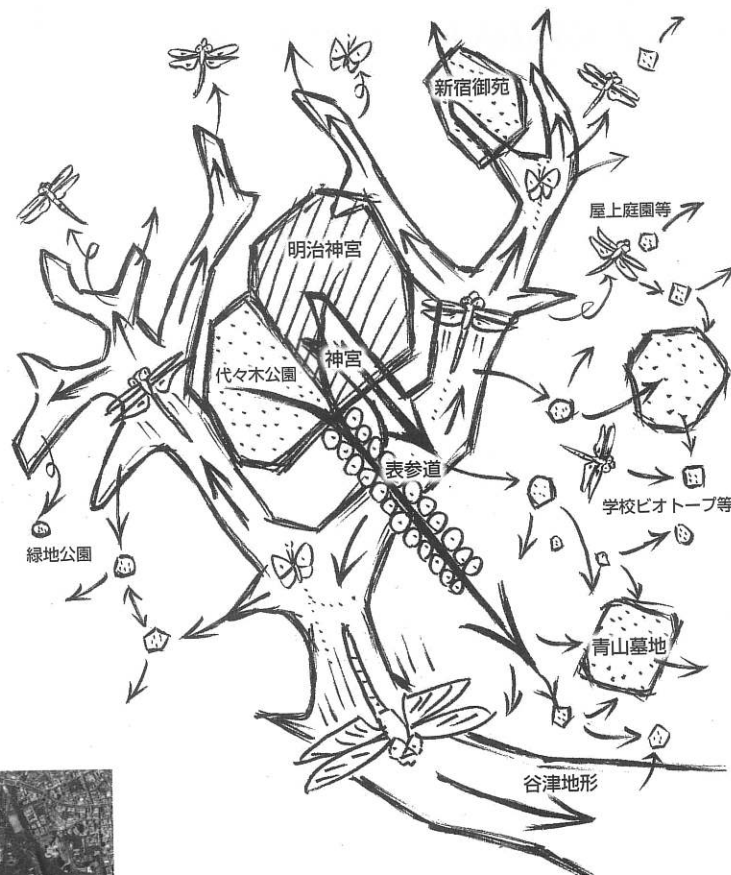


図16 神宮の森と都市空間を結ぶ生き物の道



図15 表参道は自然と都市を結ぶ架け橋
地図データ© 2013 Google, ZENRIN

原宿を
SATOYAMA 文化の発信地に

最近里山はよく SATOYAMA と表記されようになった。SATOYAMA は、自然と人間が共存する持続可能な文化や暮らし方を表す国際語になりつつあるようだ。これまで述べてきたように私は、里山を未来に向けた都市のビジョンとして捉えている。2020年に開催が決まった東京オリンピックは、日本が自然や伝統文化に根差した都市のビジョンを世界に向けて発信する格好の機会となるだろう。

オリンピックを機に原宿表参道からは世界に SATOYAMAムーブメントを発信してもらいたい。

世界中で都市に人口が集中し、環境問題など多くの課題を都市が抱えるこの時代に、都市文化の発信地である原宿が、自然と共存する都市のあり方を SATOYAMA ビジョンとして発信する意味は極めて大きいからだ。

1964年に開催された一度目の東京オリンピックでは、東京は欧米型の近代都市への変貌を遂げたが、二度目のオリンピック開催を機に東京はどのように変貌していくのか、もう欧米型という先行するモデルは無い。今度は自らがモデルとなって、未来へのビジョンを描く必要がある。

今後世界の都市では、前世紀からの近代化によって画一化し個性を失った都市空間を、その土地固有の自然や文化、歴史を生かした個性豊かな都市へと変貌させていく道筋が模索されていくのではないかと、世界に向けて開いていくだけの都市は次第に個性を失っていくが、その土地の自然や地形といった風土（固有性）に目を向け積極的に活かすことで、都市は世界に向けて創造的に開いていくことができるのではないか。それは、閉じることでより開いて

いくという発想だ。都市の里山化はそのような時代の流れの中で、都市の未来のあり方を世界に示す、先進モデルとなるだろう。

代々木台地を両手で包み込む様な谷津地形は、太古から変わらずに在り続けて来た。その大地を被う景観は原生林から雑木林や田畑などの里山へ、住宅地やビルが立ち並ぶ近代都市へと変貌したが、人々は常にこの土地と向き合いながら暮らし続けてきた。縄文式土器や弥生式土器も、その時代に谷津と向き合い暮らしていた人々が生み出した生活のデザインである。今この原宿で暮らす人々も、谷津地形に寄り添いながらデザインやファッション、ライフスタイルを生み出し続けている。

そのような人々が、都市に潜在する里山を感じ取ることができれば、この原宿表参道からどのようなデザインや生活様式を創造することができるのだろうか。SATOYAMA は都市のビジョンであり、私たちの過去と現在と未来を結ぶひとつのビジョンになり得るのではないかと。

飯島博 (いいじま・ひろし)

1956年、長野県生まれ。認定NPO法人アサザ基金代表理事。1995年から湖と森と人を結び霞ヶ浦再生事業アサザプロジェクトを企画立案運営。独自のアイデアで様々なビジネスモデルや事業を提案、上流から下流まで、地域住民、学校、企業、行政、農林水産業、地場産業などを結びネットワーク型の事業を展開。アサザプロジェクトには、これまでに延べ25万人以上が参加。全国各地の小中学校でまちづくり学習を行っている。これまで300近いの小中学校で授業を実施した。環境分野だけではなく多方面から革新的な取組みとして注目を集めている。小学生中学生時代は、明治神宮や代々木公園、原宿周辺が遊び場だった。

原宿表参道2013

水と緑が協生するまちづくり

商店街振興組合原宿表参道櫓会【編】



商店街振興組合
原宿表参道櫓会
40周年記念誌

【编者紹介】

商店街振興組合原宿表参道櫓会

明治神宮の表参道と神宮前交差点両側の明治通り沿いを区域とする、原宿表参道エリアを代表する商店街。昭和48年(1973)4月「原宿シャンゼリゼ会」として設立。昭和60年(1985)8月振興組合として法人化。平成11年(1999)9月原宿の発祥の地に位置すること、歴史的に明治神宮の表参道であること、シンボルである櫓(けやき)から「原宿表参道櫓会」と名称を変更。環境への取り組みのほか、景観整備、安全でバリアフリーなまちづくり、来街者が楽しめるイベント開催などに取り組んでいる。

原宿表参道オフィシャルナビ <http://omotesando.or.jp/>

原宿表参道櫓会事務局

電話番号:03-3406-4303 ファクス番号:03-3406-0955

原宿表参道 2013 水と緑が協生するまちづくり

商店街振興組合原宿表参道櫓会 40周年記念誌

初版 1 刷発行 ●2013年12月20日

编者

商店街振興組合原宿表参道櫓会

発行者

蘭部 良徳

発行所

(株)産学社

〒101-0061 東京都千代田区三崎町2-20-7 水道橋西口会館7F

Tel.03 (6272) 9313 Fax.03 (3515) 3660

<http://sangakusha.jp/>

印刷所

(株)シナノ

©Harajuku Omotesando Keyaikai 2013, printed in Japan

ISBN 978-4-7825-3385-7 C0036

乱丁、落丁本はお手数ですが当社営業部宛にお送りください。

送料当社負担にてお取り替えいたします。

本書の内容の一部または全部を無断で複製、掲載、転載することを禁じます。